

著：木村 琢磨

《ジェネラリスト BOOKS》高齢者診療の極意

書評者：松村 真司(松村医院院長)

「お前は日本人なのに、クロサワを観たことがないのか？」

留学先の大学院の教室の片隅で、アジアの小国からやってきた友人に当時私が言われた言葉である。動画配信など、ない時代。レンタルビデオ屋から代表作を借り、週末ごとに観た。『用心棒』『七人の侍』『天国と地獄』。衝撃的な面白さであった。いや、面白いだけではない。「生きるとは」「人間とは」といった私たちの根源的な問いに向き合った作品。黒澤映画の偉大さを教えてくれたその友人に後日感謝の念を伝えると、彼は続けてこう言った。

「そうだろう。ところで、オゾは観たか？」

あれからずいぶん時が流れた。私はその後、臨床に戻り、東京の小さな診療所で、日々地域の診療に取り組んでいる。2022年の今、私が診療を始めた1990年代とは様相は大きく異なっている。激変といってもいい。感染症に振り回され、変化に戸惑いながらも、なんとか診療を続けることができてるのは、人間というこの複雑なものに真正面から取り組んできた先人たちの知恵と経験に、今は比較的たやすく触れることができるからである。

本書『高齢者診療の極意』には長年、総合診療、地域医療、在宅医療を手掛かりとして高齢者医療に真っ向から取り組んできた著者の知恵と経験がふんだんに盛り込まれている。高齢化率が30%に近づく今日、高齢者の診療を避けて通ることはできない。高齢者とは誰なのか、そして高齢者にどうアプローチすればよいのか。医療・医学的知識を十分に活用しないと、これらがうまくいかないのはもちろんである。しかし、それだけでは十分ではない。その具体的な方法が、本書では事例を通じた「赤ひげ医師」と「のぼる医師」の二人の医師の対話を導入として、最新の知見を踏まえて概説されている。その上で、各項の最後に「のぼる医師が気づいた高齢者診療の極意」として、重要なポイントが簡潔にまとめられている。

特筆すべきは「肆ノ巻」である。高齢者の「主治医」になるためには、総体としての高齢者だけではなく、その背景にある、家族、地域、医療システム、さらには文化をも意識した診療が必須である。著者の言葉を借りれば、目の前の患者に向き合いつつ、診察室にいない「第三者」を意識する

ことである。これは口で言うほどたやすいことではない。そして、唯一の答えがあるわけでもない。しかし、ここを適切に行っていくことが高齢者診療の肝である。そして、ここが本書のタイトルが示す「極意」の「極意」たるゆえんである、と私は感じている。

長年指摘されてきた2025年問題の到来をあと数年に迎えた今、私たちが目に見えている世界は、かつて誰も経験していない問題を無数に内包しているかのように思える。しかし、その多くは、先人たちが経験してきた問題の中に、数多くの共通点を見いだすことができる。そして、それらに対して、先人たちは正面から取り組み、数多くのすぐれた作品を残してきた。

それが、クロサワ映画に続けて観た、小津安二郎の作品から私が学んだことである。

● A5・頁296 2022年10月
定価：4,400円
(本体4,000円+税10%)
[ISBN978-4-260-05027-2]
医学書院刊